欣求浄土（ごんぐじょうど）

講談社発行の古本で聞きなれない題名の欣求浄土を読んでみた。内容は日常生活の随筆で主人公はある時は全国の巨樹を求めて仕事の合間を見ては訪ね現代でいうパワースポットにたって、風雪に耐え育った姿に感銘を受けたりするが主人公は何故か心にもやもやしたものが残る。やがて病にかかり、亡くなる。先祖の墓には父母や兄、姉妹が入っており、彼も墓に入ると父がお前もやってきたかと肩を抱いてくれた。妹がお兄ちゃんは頭が禿なすってと言うと、そらお前が亡くなって50年も経つんだから、頭も禿げるよと言葉を交わす。兄貴が東京の学校に行っているときに兄貴のカメラを売り飛ばし夜の町で遊んだと懺悔すると父はそんなこと気にすることはないぞえと言う。今夜は家族そろって祭りに行こう、祭りを楽しんで、さあ帰ろうかと言って、お墓に帰っていく内容である。つまり、生前もやもやとしていた気持ちは家族愛だったのです。欣求浄土とは喜びを浄土に求めると言うことで、できれば現世で、その喜びを味わいたいものです。